

個性の心理と指導 (一)

東京女子高等師範学校教授

牛島 義友

一、個性とは

子供の個性を尊重し、個性に即した教育をなすことは民主主義教育の中心問題である。このために個性の理解、個性の發見に參考になる心理學的知識を數回にわたつて述べたいと思ふ。

このために先づ個性とは何か、又性格、人格、素質等關係のある一聯の言葉があろうがこれ等の意味を明らかにしておきたいと思ふ。

氣質 (Temperament) 親の性格は子供に遺傳するとか、持つて生れた性格はどうすることも出来ない等と言う時の性格の語は正しくは氣質のことである。即ち氣質といふ言葉は遺傳的な性質、生理的身體的なものに基礎を持つた性質を指すものであつて、醫者達が取上げるのは大體この氣質である。人格 (Personality) しかし性格は凡て遺傳によつて定まら

てゐるのでなく、生れてから後の教育、環境、修養等によつても影響され、構成されてくる。この環境的な面を特に強調した言葉に人格という語がある。この原語の意味を追究すると、性格の意味がはつきりしてゐるので少しせんさくしてみたい。

人格といふと直ぐ道德的性格を考えさせるが、英語の *Personality* の語は個人的、性格的という意味に使われている。この語はラテン語の *Personna* から来る。 *Personna* とは、昔芝居をする時俳優達は面をつけて演じたが、この俳優を呼び出すメカホンの意味していた、やがてこの面のことを意味するやうになつたという。面には登場人物に應じて士や老婆や美女や悪人等の様々の面があるが同じ俳優でも、この面をつけるが夫々異つた性格を呈してゐる。人格の本來の意味はこの假面であるというが如何にも逆説めいて来るが、この假面説にも充分理由が考えられる。

赤ちやんは面を持たず、いつも素顔のまま、天真らんまんとしてゐる。家庭の内と外との區別もなく、人前でも平氣でおしつこをする。この自然のままの幼児も成長するにつれて、面をつけることを覚えてくる。はにかみや内辨慶になつたりするのは第一の面をつけるようになつたためである。即ちよそに行く時によそ行の面をつけることを覚えるようになつたのである。よそではお行儀よくしなければならぬことを知るようになつて、子供によそ行の態度と、家の中の態度が區別されてくる。學校に行くようになると、更に「よい子」としての面をかぶるようになつて教えられる。よい生徒と勉強し、學生らしく振舞うことを覚えてくる。更に卒業して社會に出ると、面の敷は急にふえてくる。例えば教師は教壇に立てば眞面目くさつた教師の面をつけるが、家庭ではこの面を脱いでゐる。又家庭の中でも自分の親に對する時には子としての態度で、へりくだつた姿を示すが、自分の子に對しては威嚴のある父親として臨む。このように人が成長することは、色々な面を使い分けするようになることであると言ふことも出来る。人格者とはこの面を正しく使い分けるとの出来る人であるといつてもよい。自分の妻に對しても、他の婦人に對しても同じ態度で臨むようでは人格者とは言へない。こういう風に考えると、人格の本質は面であるといふのも一應の理由があることが了解されよう。

日本語の面の語にも單にマスクの他に、それをかぶる人を意味し、人々のことを面々といつたり、人に會ふことを面

會、面談などという。更にこの面は人格の中心を意味し、體面、面目、面子等はどうでもよい假面の問題ではなく、人としての中心問題となる。このように面は人格にとつて重大な要素であり、對手や狀況に應じて如何なる面を使い分けるべきかを絶えず工面していなければならず、若し使い誤ると面喰うし、従つてこんなことに心を勞することは面倒なことになつてくる。

この面はその人の社會的役割に依つて夫々相違して來るものであるから、全く環境的なものであり、生來の性質の異つた人でも同じ職業につけば共通の面をかぶるようになり、先生タイプ、警官タイプ、職人かたぎ等共通の性質が現れてくる。

ついにかたぎといふ日本語は染物の場合の形をつける型木から來たもので、この型がおかれると、皆共通の模様になつてしまふ。

以上のペリソナの語は性格の中の環境的な面を強調したものであるが、元來性格にはかかる面が重要なものであり、従つて躰や教育が大切となる。

性格 (Character) の語も教育的性格を強調してゐる語である。これはギリシヤ語の語源を持つてゐる。カラリテレスは元來、自分の領地を示す杭の意味であつたが、後にその杭に書かれたもの、何某の所有地といふ文字を意味し、又刻印徽標の意味であつたといふ。即ち刻み付けられたものであり、従つて變らない、不變のものを意味する。ペリソナは社

會的役割に應じて常に變るものであつたが、これはその人に刻印された不變の性質を指す。同時にこれは生れながらに具えていた性質をさすのでなく、後から刻み付けられたものを指す。従つて子供はまだかかる刻印がつけられていないので無性格である。教育や人生體驗によつて自分の中に刻みこまれるものである。

又カラリテルとゆう時には單なる性質、他人と異つた特質とゆうだけでなく、道德的な意味をもつてゐる。道德的に望ましい性質がカラリテルである。性格陶冶とゆうのは、單にその人の個人的特徴を伸すとゆうことではなく、望ましい性格に教養して行くことである。教會でカラリテルを頂くとゆうのは、洗禮や按手の場合聖人の名を付けてもらひ、その靈魂に聖人を刻みつけることである。

従つて性格を持つた人とは、立派な品性をそなえた人、強い信仰を持つた人を意味する。かかる性格は人生に對する眞面目な態度であるので、性格者の顔はどちらかかとうと憂うつな影をやどしてあり、悲劇的な人となる。即ち高い道德や信念にもとずいて生活しようとするし、日常の事が凡て憂うべきこととなる。こんなことで將來の日本はどうなるであらうかと世を憂ひ、又自分自身を顧みても足りない點ばかり反省されて絶えず憂うつになる。樂天主義、亭樂主義等は性格ある人の姿ではない。絶えず笑つてゐるものは子供が狂人であつて、性格者は寧ろ憂い顔をしてゐる。偉れた性格俳優といへば皆悲劇役者である。元來悲劇と喜劇とは同格のものでは

ない。悲劇こそ正統の藝術であり、喜劇は茶番狂言に過ぎないものである。

このようにカラリテルの語は教育的、道德的、宗教的な意味を持つた語であつて、性格と譯するよりも、品性とか人格と譯した方が適當でないかと思ふくらいである。

尙日本語の性格の語は非常によい語である。性は天性であり、自然的性質、遺傳的素質の意味であるが、格の語は風格とか格式の場合の如く、社會的な性質、ベルソナの意味の字である。性格に於けるこの二つの面を一つの言葉で現してゐるので、この語は非常によい言葉といえよう。

以上の氣質と人格、性格とは意味が大いに異り、而もこれが性格の重要な兩面である。性格を單に氣質的な遺傳的な面ばかりから考へるのは誤つてゐる、ベルソナの、カラリテル的な面からも同時に考へて行く必要がある。

類型と個性。尙ついでに類型と個性について考へておこう科學的に自然科學的に性格を考へる時には類型として考へて行くのである。個性は人によつて夫々相違するので、個性の數は人間の數だけある譯である。かかる一人一人の個性を研究することはとうてい不可能であり、又餘り役に立たないと考へる。學問的に考へる時にはかかる個性ではなく、似た様な人々を一緒にし、一つのタイプとして研究して行くのである。タイプとなればその數はずつと減じて、數個のタイプ、極端には内向性と外向性の様に二つのタイプとなつてしまふ。一々の人をどのタイプに屬するか、を研究したり、その

タイプにはどんな性質があり、同じタイプの人なら大體こんな行動に出るだろうと豫測したりするのである。醫者が病人を診断して病名をつけるのも、この類型的處理をしているのである。病名がきまればその治療法も定まり、又將來の経過についても豫測が出来る。同様に性格研究に就ても、その人の類型を明らかにすると、その指導や將來の生活を知ることが出来るのである。

從來個性教育という場合に、専ら知的方面の個性を考える傾向があつた。優秀兒童のための英才教育とか、特殊な才能を持つた子供の教育、或は低能兒のための特殊教育を考えたり、自分の子供の智能指數を氣にしたりする。併し智能のみならず、性質をも正しく理解し、その教育指導を考へることが大切である。頭はよいが性格が弱いために落伍者になつたり犯罪者となるものも多い。又好ましくない性質を放置してはいけぬ。性格教育とは前述の如く、單にその子供の特質を見たり伸すだけではなく、常に好ましい性格に育成することを考へるものである。これは凡ての人を理想的な標準性格に育成するといふ意味ではない。内向的な子供も外向的な子供も凡て中庸のある子供にしてしまふのではない。極端な内向や外向は極力矯正したり、緩和する必要があるが、普通の内向的な者はその内向性の持つてゐる、反省的、自己追究的なよい面は一層伸してやるが、非社會的、孤立的になる傾向は出来るだけ防止する様に指導することが必要なのである。

ある。外向的な子供はその社會性、指導性等を培つてやるが、流行性や輕薄に流れないように注意する必要がある。かかる智能以外の性格の面で、子供を正しく理解し、それに應じた教育をなすことが望ましく。

○親しい會話……5

「なに読んでいらつしやるの」

「……………」

「親音經譯話。えらいのね」

「まあいやな。うちのおばあさんがお讀みつて呉れたの」

「おばあさまが……………」

「わたし此頃少し疲れてるのか、なんだかいら／＼して困るの。亂暴な男の子や、ぐづ／＼してる女の子を見ると、ついいら／＼して来るの。自分でも悪いと氣がついてるんですけど」

「だれでも、そんなことあるわよ」

「そうかしら。それでね、その話を夕御飯の時うちのみんなに言つたら、中座へ行つてる弟が、やい、いら／＼先生なんてゆうんでしよう。わたし、またすぐいら／＼しちゃつたの。そうして、みんなに笑われたの。そのあくる朝よ。わたしの机の上に、この本が置いてあるじゃないの。だれか知らし思つたら、おばあさまなの」

「おばあさま、なんとかおつしやつて」

「わたしだつて時々、いら／＼することがあるから、忙しいお前は無理もないつて……………」